

## 「しが・ほんもの体験ネットワーク」公開交流会 発言概要

### 《開会・趣旨説明》

木下氏：本日は、たくさんの皆さんにお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。  
私は全体の司会とコーディネートをさせていただきます京都橘大学の木下と申します。よろしくお願いたします。

それでは、早速この交流会の趣旨等について、津屋さんの方から紹介していただきたいと思ひます。

津屋氏：子どもの美術教育をサポートする会の代表を務めております津屋結唱子と申します。  
湖国まるごとエコ・ミュージアムのワークショッププロジェクトでコーディネーターをさせていただいております。

私は8年前に東京から滋賀県に越してきました、関東とは違う滋賀県の文化伝統の深さ、そして、たくさんの文化施設があることにびっくりしました。そして、またそれぞれが素晴らしい体験プログラムを持ちながら、なかなかうまく交流できていない様子もまた課題として見えてきました。そういう中で地域の持つほんものを生かして次世代のために何かできないかという思ひを持っています。

今日は、この企画に際しまして、神奈川県からお二人においでいただきました。私は関東から来ましたので、関東でこういう活動ができる、また、滋賀県はこういう活動ができると、お互いに学び合う中で、また、次への課題をいただけるのではないかなと感じております。今日は、この不思議な交流会の場面というか、舞台上での交流会も初めてだと思ひますし、舞台上の全員が主役で、みんなでこれからのことを意見交流していきたいと思ひます。

### 《話題提供1「アートを活用した新しい教育活動の構築事業」》

特定非営利活動法人S T スポット横浜 アート教育事業部 主任学芸員 松尾子水樹氏  
神奈川県教育委員会教育局高校教育課 教育企画担当 主幹兼指導主事 井口貴夫氏

松尾氏：「アートを活用した新しい教育活動の構築事業」は、NPOと県教育委員会と、知事部局の文化課、さらに教育委員会の高校教育課と義務教育課程を担当している子ども教育支援課という4者で一つのプロジェクトをやっています。

神奈川県には市民活動、ボランティア活動を支援する、行政と協働して行う公益を目的とする事業を支援する仕組みとして、「かながわボランティア活動推進基金21」があります。その「協働事業負担金」というところに、昨今の子どもの問題や、学校教育の中にもっとアートの視点が取り入れられないのかという視点で申請し、年間で867万円の負担金を受けて、それをもとに事業を実施しています。

主な事業の内容は、まず1番目に、アーティストによる授業実地事業をやっています。県内の小中学校、高等学校等で行われる授業、総合的な学習の時間ですとか、芸術、人文学科系の学校認定科目にアーティスト講師を派遣しております。

2番目は教育関係者等への普及事業ということで、授業にアートを活用する取組に関心を持つ、小中高等学校や盲・ろう・養護の先生を対象に、プロの演劇人、現代美術のアーティ

ストの方が講師になって、身体ワークショップをやったりものづくりをしたり、実践的にコミュニケーションのスキルを学んでいただく機会をつくっています。

3番目は調査研究事業があります。他県ではどういうことをやっているのかも含めまして、こういった事業を進めるに当たっての情報収集と、横のつながりをつくっていく活動です。あとは年に1回、シンポジウムを開催するフォーラム事業をやっています。

この事業を進めるに当たっては行政の担当とNPOが協働することという条件があります。学校と一緒に何かをやっていくというのは、文化側にとっては大きな壁があるのも事実ですが、協働というシステムを利用することによって、教育委員会からバツと学校に「こういう事業をやるから、興味のある学校は手を挙げてください」というような連絡が通るようになりました。今私たちがやっている事例は、既存の行政のシステムを使ってトップダウンから攻めていくということと、私たちがコーディネーターに入っているのですが、学校のニーズを聞き取るところから始まるという現場主義のボトムアップも同時にやるという、トップダウンとボトムアップが同時にあるという大きな特色があります。

井口氏：神奈川の県立高校の授業の中には学校設定科目という、学校の必要に応じて工夫して設定できる科目があります。地域の歴史を調べたり、今までの科目にはないような特化したものを突き詰めてやってみるとか、いろいろなタイプのものが生まれてきます。その中に演劇パフォーマンス、身体表現という形のものが入ってきています。担当の先生がそれを教えていくということになりますが、より専門的な角度から授業を展開していく必要がありますから、そういう部分について、専門家の協力が求められるようになりました。

松尾氏：文化側と学校との間に入るという時に、教育現場、あるいは教育委員会が使う言語を理解しなければ仕事ができないなということがありました。実をいうと、教育委員会の方も文化側の言葉を理解していませんでした。共通言語づくり。そこから始まりました。信頼性を築くことがある意味協働の内容だと思っています。

高校で演劇という授業が始まる時に、私たちはまず、学校にごあいさつに行ってお担当の先生から、先生が演劇の授業の中で何を生徒たちに教えたいのか、授業の方針について聞きます。併せて学校の方針も聞きます。そして、こちらが理解をします。聞いて質問し合うことが先生の頭の中の整理にもなります。そういった中で、アーティストなどの外部からの刺激を先生はどう活用したいのか、できるのかというのを話し合います。私たちはそれを持って帰って、どういうアーティストがふさわしいのだろうかということで、アーティストの選定、いわゆるキュレーションの部分をしめます。そこがまず私たちの仕事の中心です。

アーティストを選ぶ際も、アーティスト自身が子どもたちに対して何ができるか、また、自分の作品制作や発表に還元できるような刺激がほしいと思っている、そういうアーティストに子どもたちと出会ってほしいと思っています。私たちも授業参観もさせていただきますし、アーティストにも授業参観をしてもらいます。生徒の様子を全部見てもらいます。ということで、やっと学校とアーティストのお見合いになります。そこで先生との相性もありますし、このアーティストでこの授業をいきましょうということで、やっと授業が始まります。

(授業の様子をビデオで紹介)

松尾氏：今、ちょっとダイジェスト版を見ていただきましたが、演劇表現という授業の中にア

ーティストが講師として入った時の内容です。身体を開く、身体をつくる。表現のもとになっている身体の状態をつくるというのが、学校側のリクエストでした。私たちはそれに答えるように、そういうワークショップが得意なアーティストを連れていきました。「軸を発見する」というのは、言葉の力、鍛錬の力、そういったことに通じます。自分の身体を見つめ直して軸を発見して、軸を発見するとフラフープがうまくなります。そういうことでフラフープ合戦をしたんですが、一見ゲームに見えますが、楽しみながら表現のもとになるモチベーションの出てくるもとになる身体をつくるということにつながります。

演劇の特徴は身体性と言葉ですから、自分の考えているイメージを人に伝えて、「あなたはどう思うの。私はこう思うんだけど」と一つのものをいっしょにつくり上げていくときに、コミュニケーション能力が問われるわけで、実践をしながらコミュニケーション能力の向上とか、問題解決能力ですとか、そういうことが成果になってくるのではないかという授業です。

(国語の授業をビデオで紹介)

松尾氏：中学2年生の国語で「対話を考える」という授業です。最初に出てきた二人のダンサーが踊っているダンスこそが対話です。それをどうやったら中学生に伝えられるかなというところで、演劇のアーティストを一人入れました。彼は言葉によってそれを生徒に伝える役割をしてもらいました。後は自分の身体を自覚するという意味でマッサージもやりましたし、ゼスチャー伝言ゲームのようなこともやって、言葉だけでなく情報は身体から伝わっていくんだよということとか、あらためてコミュニケーションの難しさを、体験してもらいました。

先ほどの演劇の授業もそうでしたが、演劇の授業の中で演技指導をしているかという、そればかりではなくて、むしろ表現の基本的なことにかかわる身体づくりであったり、モチベーションづくりであったりということが必要とされているのかなというのが、2年目を迎えた私たちの活動の中での感想です。

井口氏：いわゆる国語だから言葉だろうとすぐに直結しやすいんだけど、体を含んだもの、少し広い身体ものとしてとらえることは当然できるだろうし、それぞれの教科科目の中にそういう要素を入れていくというのは十分考えられると思うんですよ。それは本当に指導者の工夫次第で、いかようにも発展していける部分だと思います。

松尾氏：来年はどうしていくかということで、美術館との連携も視野に入れながら、学校の教科の中にアーティストがもつ視点を生かした授業づくりも検討しています。

井口氏：これからは美術の内容を見ても、いろいろな部分が必要とされる、「デザイン」「映像メディア表現」といった新しい分野も内容の中に入ってきていますし、鑑賞みたいな授業についても少し充実させていった方がということもありますから、そういう意味では美術のいろいろな部分を生徒に提供していかなければならない。そういう時期に来ていると思います。例えば映像メディア関係の「パソコンが苦手だから」「ビデオを撮ってどうのこうのはちょっとな」という先生も正直に多いと思います。そういう部分について、専門的技術を持ったアーティストがかかわって先生とともにつくっていくということは、これから必要になってくると思います。これは音楽についても、書道についてももしかしたら言えるのかも

れないですね。

松尾氏：その学校の先生が苦手とする部分、もしかしたら不足かなと思う部分に対して、今活躍中のアーティストを講師として行くということで、生徒が何よりも美術を好きになることにつながっていけばいいな、と思っているのが私たちの活動の基本です。

井口氏：外部の講師というと、授業そのものを外部委託するように受けとられ、反発する先生もおられます。

松尾氏：美術館が出前授業をしますよとか、外部講師として職能のある人が学校に入りますよと言ったときに、皆さんも直面するかもしれない問題です。ですから、先生側の意識を変えていきたいと思っています。でも、変えていくためには、実例をつくりながらそれを報告して、先生たちを納得させる必要があります。

井口氏：さらに地域の方とつながりを持つことで、それが授業の中で生かすことができる、あるいは実際に地域に出かけていって普段体験できないようなことを授業として体験することもできる。そういった延長線の中にNPOも視野に入れてこれから授業づくりをしていただければ、どんどん豊かな授業を組み立てていくことができるということだと思います。

松尾氏：STスポット横浜というのは、横浜駅西口に小劇場を持っています。そこで、あるアーティストが自分の演出した作品を上演しました。それを高校生様特別ご優待ということで、ただで高校生に劇場空間を体験してもらって芝居を見てもらいました。アーティストが授業に出て行くだけではなくて、劇場とつなぐことも私たちの使命だと思っています。これも学校の信頼関係を勝ち得て、先生だけではなくて保護者も協力してくれて初めてなし得る高校生の移動なので、そういうところも含めて関係をつくっていきます。

私たちNPO法人STスポット横浜が果たしている役割は行政との間に入る、学校の中では先生とアーティストの間に入り、授業の中では生徒の間にも入ります。協働というお仕事をやっていく中では、縦割り行政の各セクションの間に入って同じ問題について話し合うという場づくりもしています。また、行政とボランティア活動をやっている市民を結び、中間組織でもあります。あらゆる隙間に入って媒介者として活動しています。

学校の普通の授業もそうですが、生徒さんが人生の中でそれを生かしていくのが今日の、明日の話ではないように、アーティストにとっても生徒と直に接する現場に出て行ってもらうフィードバックするところがすぐあるというもではないのです。しかし、ダンサーが教室で踊ると生徒からダイレクトな反応がきます。中学生は遠慮がないですから、ぼんぼん感想が飛んできて、「ああ、そういうふうに見られているんだ。おもしろがってくれるんだ」というのを感じたダンサーたちは自信を持ちました。授業の後すぐに「トヨタコレオグラフィアワード」という振り付けの大きな賞があったんですが、そのオーディエンス賞を取ったりとか、アーティスト自身も生徒たちの反応、感想にすごく励まされたと言っていました。

演劇のアーティストの場合は、脚本家が行く場合もあるし、俳優に行ってもらう場合もあります。脚本家が行く場合は、最初の一言でと、彼らは何を持って自分のアーティストたるすごさを見せるかというとなかなか難しいのです。だから、やはり言葉の力でどれくらいイメージを言葉として伝えられるか、自分の言葉の精度を上げていくみたいところで反応をととてもダイレクトに感じていると思います。

アーティストが学校に行くことの中で大きいことは、本気で好きなことをやっている大人の姿を見せることだと思っています。それはある意味ほんものの姿を見せる、ほんもの体験だと思っています。そうすると一種のキャリア教育、そういう視点も含まれますし、学校の先生が言うには自分の親と学校の先生以外に大人とあまりしゃべる機会がない中学生、高校生たちが、全然価値観の違うアーティストが身近に行くことによってすごくリラックスする子もいるそうです。全員そうだというわけではありませんが、少なくとも先生や保護者と違う人が行くということが何かによって救いになっている面は大きいと思います。

一方、現場の先生とアーティストのバランスを取っていかないと授業が成り立たないので、先生が何を求めているのかを見ぬいて、それをアーティストに理解してもらって、授業内容を変更したりしてもらわなければいけないところもあります。そういうところをどう納得してもらえるかということに気を配りながらやっています。

あと、先生方を対象としたワークショップを実施していますが、例えば、ふだん先生が生徒に「自由に表現してみなさい」ということに対して、どう生徒が反応しているのか、立場を変えて体験していただきたい、先生自身がつくった作品を素材にして、ほかの先生と話し合うコミュニケーションの時間を取ることがどんなに重要なことを、ご自分の肌で体験してもらいたいという思いがあります。また、現場の先生同士が横のつながりをつくる機会にしてほしいというねらいもあります。

井口氏：演劇ということで、担当の先生はお互いに不安をお持ちになって、そういう方たちが集まって、いろいろと悩みなどを話し合う機会にもなり、それがいいつながりというか、技術を学ぶワークショップだけではなくて、お互いの情報交換の場にもなりつつあるので、そういう場を少しずつ来年度は増やしていってほしいなという気持ちでいます。

私は教育委員会所属ですが、県として文化課もかかわっています。定期的にお互いが集まって具体的な事業について話し合っています。協働というふうに一概に言いますが、結構難しいなと思います。行政も「STさん、頼むよ」という形で終わってしまう危険性はあって、それはまずいなと自分自身でも思います。何をすれば協働になるのか、いつも考えています。例えば、事業を実際にやっているところにこちら側も出向く。それなりの意見を、いろいろな人から聞いて、収穫としてこちらが整理していく。あるいは施策の中で新しくそういうアイデアみたいなものを使えないかどうか考える、ということだと思っています。黙っていい顔をしていれば協働態勢が取れるかということ、それは全く逆の話で、考えていることを伝えるべきだし、それからSTさんの方からも思っていることはフランクに言ってもらった方が、こちらとしてもそれを参考にして動くことができるだろうし、そういう関係づくりをできるだけ気をつけて、やってきているつもりです。

木下氏：松尾さん、井口さんありがとうございました。学校に限らず文化施設も含めて、かなり硬直化しているのではないかと常々考えています。きれいな言葉を使えば、規格化されてしまったところがあるのではないかと。それで、本当に子どもたちが勉強を好きになっているのか。文化施設に本当に来ているのかということです。私は、文化施設の中でもミュージアムをやっていますが、ものすごく疑問を感じています。それに対する回答がない。ここでできることは何か、できないことは誰が担うのか。そういう中で、それぞれが気づいてつなぎ合って、それから最終的に新しいものを生み出したり、文化なり、芸術なりをみんなが好きになる。そのゴールを見ていくことが大切なのではないかと思っています。協働するこ

とが目的ではないですね。そういうことを今、すごく感じました。

## 《話題提供2・体験プログラムについて》

MIHO MUSEUM 学芸員 畑中章良氏

畑中氏：松尾さんと井口さんのお話の中でも出てまいりましたが、行政側と我々との共通言語がなかったということで、そういう状況は連携授業をプログラム化していく初期段階で同じでした。私の隣に今座っておられる馬場輝代先生との出会いが、すべての始まりで6年ぐらい前になります。その当時のことを考えますと、現在の状況は本当に夢のような気がします。

連携授業については、「連携」しかも「授業」という言葉を使う以上は、学校が主体ですし、学校の中の主役は子どもですから、子どものことを中心に考えてすべてをつくっていくというのが、本当のあり方ではないかと思っています。あくまでも学校が中心になりますし、そこに美術館、博物館、そして専門家の方々、それをサポートしてくださるボランティア、いろいろな人の手助けをいただいて、学校でできないことを補ってやっていくのが理想的な姿だと、何年かやってまいりまして思っております。

(連携授業の様子をビデオで紹介)

畑中氏：連携授業は、子どもの表情が変わる。やっている大人も楽しい、目がキラキラしている。一度参加した人はやみつきになる。その繰り返しです。そこに大きな魅力もあり、大切な部分も込められているのではないかと思います。

各館、それぞれ特色のあるプログラムでいろいろな活動をされていると思いますが、私も美術館が所蔵する作品を題材にしたり、その関連する内容を絡めてプログラムをつくるのを基本にしております。雷雲蒔絵鼓胴(らいうんまきえこどう)という鼓の胴体の部分ですが、竹生島に奉納されてそれを信長が見たといういわれのある作品があります。それに信長から出された書状が2通附属しております。合計3点の美術品を核にそこに含まれているいろいろな情報を紡ぎ出して関連づけ(これは学芸員の得意とするところで)、先生方と相談しながら、学校のカリキュラムとうまくかみ合わせて構築していきます。

鼓はお能、歌舞伎で使われる楽器です。一つのキーワードとして楽器という部分を紡ぎ出し、音楽の時間と関連させた内容になっております。これは総合的な学習の時間として位置づけていただくこともできますし、音楽の時間に関連づけていただくことも可能です。実際に、6年生の教科書には、いろいろな和楽器、日本の古典楽器といいますが、伝統文化に触れるということで三味線とか太鼓、お琴、尺八、横笛といったものが出てきます。そこに関連させて用意できる楽器を取りそろえて行いました。子どもたちは直に触れて、自分たちで音を出すという体験もしますので、とても楽しみにしているようです。実際にやってみると、音(おと)は出ても音(ね)にはならないんです。ポーンというきれいな音(ね)は出ません。単純な楽器ほど奥が深いと痛感いたしました。

薩摩琵琶のプロの奏者を招いた授業もしました。日本で150人ほどしか奏者がいない楽器です。それも高齢化が進んでいるということも考えて、非常に危機感を持たれております。次世代への伝承ということも考えて、非常に力を入れた活動をされております。

音楽の時間では実際に琵琶の演奏を聴くということになるのですが、信長の書状の中に「青葉の笛」という言葉が出てきます。この「青葉の笛」は、いろいろな伝説がある昔から名笛として名の通った笛です。義経が持っていたとも言われておりますし、平敦盛が一ノ谷の合戦のときに、討ち取られたときに胸に携えていたのが、その笛だという伝承もございますので、琵琶の演目は、平家物語の敦盛の段をいつもお願いしております。

言葉の力という国語の内容にも絡んでできますが、平家物語と琵琶の音色の語りに触れて、次の信長のプログラムへと引き継がれ、子どもたちの中で関連づけられていきます。琵琶に触れる体験は大人でもなかなかできないと思います。非常に貴重な体験といえます。（6年生などは特に気恥ずかしいと思っている子が多いようですが）心の中では自分で触りたい、弾きたい、たたきたいと思っているので、順番にできるだけたくさん子どもたちにいろいろな楽器を体験していただくという時間を取っております。

次に、信長の書状の時間です。ほんものを美術館から持ち出すことができればいいのですが、なかなか難しいのでレプリカを使います。レプリカといっても量産されたものではなく、1個しかありません。それを学校に実際に掛けました。これは美術的な勉強です。掛け軸とはこんなものですよ、という勉強にもなります。子どもたちはこの書状のコピーを持っております。コピーを見ながら、掛け軸と比べることによって、視覚的にも昔の戦国末期の手紙の様子を感じることができます。

どこかで担任の先生にかかわっていただきたいということもあり、子どもが読める言葉（手紙は非常に難しい、大人でもなかなか読み解けない筆遣いがされております）つまり現代語訳をしたものを一緒に配り、そこから子どもたちが知っている言葉を探し出し、発表してもらいました。信長とか、小鼓、竹生島、青葉の笛という言葉が出てまいりますので、子どもたちの方から発表してもらいます。その後は書状の内容の説明に入って、自分たちの住んでいる地域と、手紙の内容が密接に関連しているということを実感してもらうということになります。

お茶席も設けました。織田信長とお茶も非常に密接な関係がございます。この茶席に入る前に千利休のビデオを見てもらって、利休さんと信長との関係などのお話をしながら実際にお茶の体験をしてもらいます。お抹茶の味、お作法の勉強ということもあるのですが、それとともに茶の湯という日本の代表的な伝統文化の、日本人が培ってきた精神的な部分、相手に対する思いやりとか、もてなしの心などをわかりやすく体験を通して感じてもらうという時間になります。

また、別の授業では、織田信長の書状と雷雲蒔絵鼓胴という作品を通して、同じようにキーワードを探して勉強をした後に、多賀大社の方が中心になさっている滋賀雅楽会にご協力いただき（山田小学校や常磐小学校に毎年行かれているということを知っております）、教室に舞台設営をして雅楽、これは6年生の教科書に出てきます越天楽、教科書では今様（いまよう）と現代風に譜面が書き直されていますが、その雅楽が奏でる越天楽と子どもたちが習う今様がいかに違うかという勉強もします。後ろに幕を張っておきます。この幕に家紋が入っていますが、これは実は織田家の家紋です。織田木瓜（もっこう）という家紋で信長と雅楽は実は非常に深い関係がありました。私は最近勉強したんですが、応仁の乱で京都が荒れ果てたときに、御所にいた雅楽の人たちはちりちりばらばらになります。その後信長が、御所を復興しますが、その中に雅楽会への経済的な支援というのがあり、そのことによって

雅楽会が再び活動できるようになりました。それがいまだに恩義を大切に、幕に家紋を入れるということで、ずっと引き継いできているということを知りました。信長ととても関連があるということで、こういうプログラムができあがりました。

ここでも楽器に触れるという時間もたれ、なかなか触れられない楽器でもあり、子どもたちにとって非常に貴重な体験になったと思います。

鳥獣人物戯画（ちょうじゅうじんぶつぎ）を題材にした授業もします。これは国宝の作品です。本物の国宝を教室に持ち込んで見せるというのはまず不可能ですので、実物大のレプリカを使って紹介します。鳥獣人物戯画には甲乙丙丁と4種類がありますが、そのうちの甲が国宝に指定されております。それは現在1巻の巻物ですが、もともとは2巻あったと言われていました。その2巻目は昔高山寺が焼けたときに散逸したと言われていました。そのちりじりになった一つが現在はミホミュージアムの所蔵品としてあります。それにちなんだ内容ということになります。

鳥獣人物戯画でカエルとウサギがお相撲をしている絵は、教科書でごらんになった方も多いと思いますが、果たしてそれが巻物を全部広げるとどれくらいになるかというのは、恐らくほとんどの人が知らないと思います。とても長いのです。子どもたちは非常に長いということがインパクトとなり、記憶の中、心の中に残ると思います。

小学校2年生の授業ですが、鳥獣人物戯画を通して、模写という要素が入ってきます。学校の授業で、昔の遊びを習う単元があります。あぶり出しは現在ほとんど行われてないと思いますが、昔は、冬場、ミカンの汁であぶり出しをしていました。子どもたちにストーブを使って、あぶり出しの体験をしてもらおう。子どもたちはミカンの汁が焦げて浮き上がってくるということ自体に非常な関心を寄せますが、ストーブでこんなものをあぶっていいのかという、普段はしてはいけないと言われていたことができるというのもあって、みんな興味津々でやります。ミカンを二つに割って絞り汁を出すのですが、そのミカンを手でギュッと絞るということ自体も家ではしてはいけないと言われていたことでしょうか、そのこと自体に興味を持つ子もいます。

最初はどうやって、やけどをせずに紙をストーブに近づけたらいいのかなと考えました。いろいろな材料をかうとお金がかかるということで、割り箸の先に黒いクリップを引っかけて、わずか数十cmですが、割り箸と腕の長さだけ離れることによって、熱さがかなりしげました。ちょっとした工夫で考えられるいい例だと思います。

以上が、最近行った事例です。もう一つ、篠原小学校（野洲市）の事例があります。MIHO MUSEUMでの尾形乾山の特別展があったのですが、その展覧会を通して、遠大な内容のプログラムを、美術館で考えたというより、全体の活動スケジュールは学校の方で決められて、いろいろな方が協力してできあがったプログラムもあります。

## 《話題提供2・学校と文化施設との連携について》

草津市立笠縫東小学校 校長 馬場輝代氏

馬場氏：笠縫東小学校の馬場です。先ほども畑中さんの方から話がありましたが、本格的に連携授業を始めましたのは、平成11年度です。12年の1月に津屋さんと、近代美術館のカードゲームを始めたのが一番初めです。1時間かかってカードゲームをしていたのがこの連携授業の発端になりますが、それから丸6年たちました。丸6年の間に取組を支えたものは人

と人とのつながりかなと思っています。

私は教育現場にいますが、すごく狭い世界の中で私たちは活動してきました。連携授業を通して初めて学校外の施設で働く方と交流を持たせてもらったり、さらにそれと何の利害もないボランティアの方たちと交流を深めさせていただいたということが、一番大きな力ではないかなと思っています。6年間取り組んでいる間にずいぶん連携授業も変わってきたと思います。

最初は丸投げみたいな状態から始まったと思いますが、途中で学校現場の教師とそれから美術館の方、サポートする会の方たちの話し合いの中で、けんけんがくがくの議論もありました。そういう中から美術館、学校現場から、それぞれにこういうことはどうだろうというアイデアを出し合って、授業をつくれるようになったことが一番の大きなことかなと思っています。どんどん広がってきているというのが現在の姿です。私の前任校の老上小学校で始めまして、この連携授業が6年の間にずいぶん成長して、私たちの手を離れたところで活躍を始めています。

連携授業の実際として、笠縫東小学校の6年生の取組を2例挙げさせていただきました。まず、5月に社会科で、2月の段階では歴史学をやっていますので、その発展から野焼きという形で連携授業を組みました。ただ、今年は単に野焼きをするというのではなくて、担任がいろいろなアイデアを出して仕組みで来ていましたので、それをもとにというのが今年度の新しさかなと思います。あたためてきた仕掛けは、野焼きをするのは陶芸家の宮本ルリ子先生から教えていただいた、炭で焼くという野焼きをやっていただいたんですが、子どもたちが5年生のときに、校外学習で、それも環境教育の一端だったのですが、木を切ること、木を植えることを子どもたちに体験させてきています。その木を切ったのを学校に持ち帰りまして、ごろごろと転がしながら乾かしてきました。それを野焼きのときに使ったということで、2年越しの学習になります。

その炭焼きを支えていただいた方、それから、その後の炭を使った野焼きを支えてくださった方など多くの方がこの学習を支えていただきました。まず、草津塾といって環境のNPOの方たちです。それから南部地域振興局の方、県の職員さんです。栗東の森林組合、プロの炭焼き名人さんの職員さんです。それから、宮本先生をはじめとするプロの陶芸家です。そして陶芸の森美術館です。それから子どもの美術教育をサポートする会、保護者、MIHO MUSEUMという形で、たくさんの人たちが子どもたちにかかわってくださいました。

その次に6年生の1月、信長の書状から日本文化に触れるということで、畑中さんから説明のあった連携授業です。音楽の授業の中で日本の楽器という学習がありますので、それから発展させた形で三味線や鼓、笛、太鼓、ビワということで、触れさせていただきました。

楽器の演奏や楽器に触らせてもらい、次にビワで平家物語、敦盛の段を語っていただきました。その敦盛を舞った信長から美しいものを愛した信長へという形でどんどんとリンクしていきます。畑中学芸員さんから美術館にある信長の書状、それから竹生島の青葉の笛や静御前の名前も出てくる雷雲時絵鼓胴の話もしていただきました。それから、信長の愛した茶の湯であるとか、お茶の体験という形に広がっていきました。

このときの連携は三味線や太鼓やビワの奏者につきましては、プロの方、またほとんどプロに近い方が子どもたちにかかわっていただきました。畑中学芸員さんをはじめMIHO

MUSEUMの方たち、それから武者小路千家の官休庵の但見師範、それから子どもの美術教育をサポートする会、お茶のボランティアという形でいろいろな大人たちが子どもたちにかかわって下さいました。

連携授業を終えた子どもの思いから描く子どもの育ちということで、子どもの作文を少し持ってきていますので、それを紹介させていただく中で、こういう連携授業が子どもの心にどう響いているかということ、ちょっと考えていただきたいと思います。

まず、はじめにお茶というのはすごくインパクトがありましたので、6年生の子どもがお茶について感想を書いたものです。武者小路千家の師範に来ていただいたということもあり「僕はお茶は少し心得があります。でも、お茶が表千家、裏千家、武者小路千家という三つの流派があることは初めて知りました。「僕のおばあちゃんがお茶の先生で週1回くらい習いに行きます。とてもおいしいお茶とお茶菓子でした」と書いた子もあります。それから、この子はピワを聞いたのがすごく心に残ったみたいで、「ピワの平家物語が素晴らしかった。声がとても聞きやすく通る声で平敦盛と熊谷直実の乱闘がその場にいるように伝わってきました。太鼓もすごい迫力で終わったときに興奮が一気に収まるような感じがしました」と書いています。それから、もう一人の子どもはお茶と同時にその後、待庵(たいあん)のビデオを見せてもらったのがすごく心に残ったみたいでお菓子のことも書いております。

「お菓子は柚の香りと味がしたように思いました」確かにそうでした。すごい感性だなと思いました。「抹茶もおいしかったです」この後です。待庵のビデオを見せてもらったことはすごくこの子の心の中に食い込んでいるようで「国宝の茶室は思ったより質素で品があったように思います」と書かれています。「千利休のわび茶の精神があらわれていると思いました。私は秀吉がつくるのを命じているというのでテレビで知った黄金の茶室だと思っていたので、予想が大きく外れたのでびっくりしました」と書いています。もう既にこの子の中には秀吉が黄金の茶室をつくらせたというのが頭に入っていたと思うのですが、それとこのときに見せてもらった待庵の茶室がリンクされて、すごく品があると思ったんだろうなと思いました。

その後、次からは滋賀の子どもたちは、5年生のときにフローティングスクールというのがありまして、全員の子どもたちが琵琶湖の上で湖の子に乗って1泊2日を過ごすのですが、そのときに必ず竹生島に行きます。畑中学芸員が青葉の笛やそれから、雷雲鼓胴を出していただくのは、子どもたちにとって本当にゆかりのものという形で出しているんですが、ちゃんと子どもたちはそれをかぎ分けています。それが次から出てくる子どもたちの感想の中にあります。「織田信長は実は音楽などを好んでいました。そして竹生島に書状を出しました。青葉の笛を見て、見事な名物であると言ったり、静香所持という小包を見たいと、手紙(昔でいう書状)を竹生島に送った。僕は滋賀県の竹生島と信長が深い関係にあったとは知りませんでした」自分の持っていた知識と新しく学んだことがつながっているということで、学習というのは、こういうところにあるのかなと思います。さらに竹生島にこだわったのがたくさんあります。「信長はよく戦って短気なイメージだったが、芸術にも興味があったのは初めて知った。信長が見た青葉の笛は、義経が鴨川に落としてしまったが、その笛を拾った伝説があって、笛にも歴史があるのでもっとほかのものにも歴史があると思った」ということで、ものにはそれぞれの歴史があるということ子どもは学んでいます。「信長が見たがっていた小鼓のことは信長が知っていたので、信長は芸術のこともよく知っ

ていて驚いた。信長の書いた書状が目の前で見られるのは、すごく貴重な体験でうれしい。竹生島は小さい島だが、有名な人が来ているのに日本人にあまり知られていないので、もっと有名な島になってほしい」ということで、えらく竹生島に肩入れをしています。それから、最後ですが、「滋賀県がこんなに歴史に関係があることを初めて知りました。また、竹生島の笛がすごく有名だったことはびっくりしました。織田信長がほしがるほどすごくいいものだと思います。こんなに国宝級のものがあるのに、なぜ滋賀は琵琶湖しか有名ではないのだろうと不思議に思いました。もっと滋賀のことを知ってほしいと思いました」というふうに、この子どもは自分の住んでいる滋賀にずいぶん目を向けていますし、自分たちの住んでいるところを見てほしいということも考えるようになっていきます。

子どもがそれまでに持っていた知識、経験と結びつけていけるような体験をさせていくことが、すごくこの子どもたちがこれから先に進んでいく方向を一つ示していくことかなと思います。それから、連携を通して歴史上の人物や物事に出合っていくことによって、新しい見方や考え方、感性をはぐくんでいくような連携授業のあり方が大事かなと思います。

それから、美術館、博物館だけの連携にとどまらず、例えば図書館や地域の博物館、歴史的な財産、私の住んでいます草津市ですと、草津の本陣などとのリンクした連携を図っていくということが、総合的な形で子どもたちに感性とともに、文化的なよさを体験させ考えさせていくことにつながるのではないかなという思いを持っております。

## 《話題提供2・公民館の新しいあり方を考える》

信楽公民館長 大平正道氏

大平氏：子どもの教育という中には、二つの要素がありまして、一つは学校教育があります。それと、学校が終わった後や土曜日、日曜日に子どもたちがする大人たちが集まる社会教育という面があります。この二つをどういうふうにつなげていくかというのが、我々のテーマです。もう一つは、公民館は何をすることでしようかというのが、実は初めて公民館館長になったときのテーマでした。公民館は何をすることでみんなに聞きました。「公民館は趣味の講座をやっているところだろう」もう一つは「公民館は時間が来たら追い出されるし、食事もできないし、行ったらおっちゃんかジロツとにらむようなところだ。行きたくない」「同じような人が集まっている」「子どもたちが遊べる場ではない」とかいろいろ意見がありました。

その中で、私は公民館には大切なことが三つあると思いました。「公民館とは集まる場所、学ぶところ、つなぐところ」この三つの要素が必要になってくるだろうということです。学ぶ、つくるところはいろいろな学び方がありまして、趣味の講座もあるし、環境問題であるとか、子育ての問題とか、さまざまな問題に取り組んでいく、学んでいく場であるということがあります。これは当然のことなのです。

公民館長が多分あまり意識してないであろうというところで、「つなぐ」があります。つなぐとは、ものすごく大切なところで、いかにいろいろなところと連携をとっていけるかということです。公民館は、60年以上たちまして公民館不要論も出ていて、公民館は生涯学習センターにかわったり、地域のコミュニティーセンターに変わっていくという状況があらわれていまして、公民館自体そういうところで学習をするという意味合いが薄れてきたように

思います。それと、指定管理者制度がありまして、経済的な面で社会教育、そういうところには予算をつけられない、自分たちで運営しなさいということになりますと、それではどうするか。いろいろなところと連携してやってやらなければならないという事情があります。

そういう事情の中で、自治会との協力を考えています。自治会の事業を公民館と一緒にやっけていながら、楽しいものに育てていこう。もう一つは社会教育と学校教育は完全に別物だととられがちですが、一緒にやっけていこう、学校と仲良くしよう。これは子どもたちが学校が終わった後、公民館に集まって楽しく遊べる場づくりでもあるということで、いろいろな事業を展開していく中で、先生とも仲良くなって、学校で抱えている問題とか、そういう子どもたちの様子とか、そういうのを十分理解する。学校でできないところを公民館で何かやっけていこうという事業の取組を現在展開しております。

つなぐということにおいては、一番大切なことはその接着剤です。私の公民館の例もそうですが、一つは子どもの美術教育をサポートする会がありまして、津屋さんと知り合いになったおかげで、陶芸の森であるとか、MIHO MUSEUMであるとか、その他、いろいろなNPOの人たち、また学校との関係もスムーズになり、どんどんそういう人間関係が広がってくる。そして一緒に体験をしていく。その中で、我々が持っている公民館は人が集まる場だという実体験をしてまいりました。

公民館はできるだけ人に来ていただくというので、例えば合宿をやります。2005年湖国アーツ&バザールというので焼物の林間学校というのを2泊3日で開きました。昼間は陶芸の森で活動する。夜は公民館に帰ってきて、またワークショップをしました。また、アートインレジデンス「たぬきの森」森のステージという事業で、これも昼間は森にステージをつくってやって、帰ってきて夜に公民館の方でその演劇をするための衣装づくりであったり、いろいろな活動をしました。また別の例では、フランスの女性が信楽の中で「持続可能な観光と環境」というテーマで研究されているということで、子どもたちと一緒にワークショップをやりました。これも夜を徹してやっております。合宿ですので夜中もやりますし、食事の支度もやる。これからの公民館のあり方を考えていく場合において、やはり、使っていただく人に自由に使っていただく。そして、それを使っていただくことによって、人がたくさん集まってくる。集まってくる方々とまた手をつなぎながら、公民館はどうしていったらいいのかなと考えて、それ自体が私は社会教育の一環だと思っております。

木下氏：どうもありがとうございました。公民館も本当にいろいろ大変な課題を抱えながら、いろいろな意味で位置づけが今不明確であると思います。その中で多分職員の方も多々苦労されている状態だと思います。しかし少なくとも拠点がありますので、その拠点をどう生かしていくのかという一つの事例をご報告いただいたかと思います。どうもありがとうございました。

(休憩)

#### 《意見交換》

木下氏：できるだけ時間いっぱいまでやっていきたいと思います。まず、滋賀の事例を伺いましたので、それに対して再コメントを松尾さん、井口さんの方でいただきたい。

松尾氏：私たちも悩みどころなのですが、学校側から、連携授業の報償費とか謝礼金の支払い

はありますか。

馬場氏：お金は学校にないです。本当にないのでその事情を話して、本当にボランティアで申しわけないけれども、来ていただいています。特に、そういうお金がプールされているところは一切ありません。ただ、年に1回校外学習に出るときは、美術館に行く体験もどこかの学年では必ずしたいなと。それも子どもたちはほとんどお金がかからないという形で。ただ、バス代だけはかかりますが、そういう現状です。

松尾氏：ありがとうございます。私たちは予算を県からもらっていますので、その中でアーティストに1回の授業に2万円をお支払いしております。後に続けるためにも職能を持つアーティストにお金を払うシステムをつくっていきたいという思いがあります。

学校はお金がありませんから、アーティストと学校でお互いにメリットがある関係に仕組みとしてできないかと考えています。例えば、学校からギャラはもらわないけれども、学校という器とか人的ネットワークをアーティストが使うことはできないのかなとか、そういうお互いのメリットがある関係性をつくりながら、持続可能なシステムを目指せないかなと考えています。

井口氏：神奈川でも公民館や地区センターなどに高校生が出かけて行って、何か催し物をやったり、あるいはそこでの行事に参加することはあるのですが、なかなかそれぞれの地域の施設の中身について知らないのが現状です。そういう部分をもっともっと掘り起こしていくことの重要性も感想として持ちました。

いくつか質問があるのでお答えします。「県の担当者が変わることで取組が後退するような心配はありませんか」というのがありました。これは結構心配しているところです。もちろん情報を共有しながらやっていることは確かなのですが、やはり主として自分がやっていることをどれくらい引き継いでいるのか、常時引き継いでいるのかを考えると、やはり、細かいニュアンスまでは伝え切れてないところがあります。私自身もどれくらいこのセクションにいられるかという心配もあります。ですからできるだけ、逐一それぞれの事業については報告をして、課の中でも話題として取り上げていくように努力していくという程度の答え方になってしまいます。

松尾氏：担当者がかわっても、取組を後退させてはいけないので、もう一回関係性をつくり直していきました。NPOとしても、きちんと文書を残して蓄積しておいて、自分だけの理解にしておかない。私が明日死んでも活動は続いていくような態勢にする覚悟は多少はしております。

井口氏：それから、「STスポットに委託している高校には進学校が含まれますか。魅力のない高校に対するいいわけをしておられるのではないのでしょうか」という手厳しい質問があります。確かに、進学校というよりは、今回の場合は演劇がかなり中心に来ていますので、もちろん、その演劇を必要としているところに対応しているのが現状です。このアートといった場合はいろいろな分野のものが当然含まれます。現場でこういう部分が必要だなというのを出していただいて、それをこちらの方で精査しながら、あるいは現場とやりとりをしながら必要に応じて対応していくという考え方でいます。ですから、全県立高校に向けて要望を出してもらっています。事実、いくつか回答として返ってきているものは、工業高校であったり、普通科の高校であったり、あるいは中身の分野についても美術的なものが入っていたり、確かに少し演劇とは違った分野のアートをこういう授業の中に活用していこうという意

識が少しずつ出てきています。それをこちらの方でもできるだけくみ取るような形で、考えていきたいと思います。

松尾氏：勉強云々とかそういう学校が評価する面と私たちが見ている面は違うので、そういう私たちも楽しんで子どもたちと一緒に過ごさせていただけますので、あまり後ろ向きに考えないでください。

井口氏：神奈川県の場合は高校というのが中心ですが、子ども教育支援課という義務教育を中心としたセクションから市町村教育委員会を通じてなげかけをしていますので、来年度小学校、あるいは養護学校から要望が挙がるケースは出てくると思います。先生方のワークショップの中にはいろいろな講師が集まっていますし、それぞれのアートを活用したアイデアというのか、そういう模索も始まっていますから、そういった意味では、学校でちょっと採り入れてみようかなという要望が出てくる可能性があると思います。それについて、子ども支援教育課と高校教育課で、連絡を取り合いながら整理していきたくと思っています。

木下氏：どうもありがとうございました。いろいろ質問票をいただきまして、ちょっと印象に残ったものがいくつかありまして、まず、一つが匿名の質問ですが、「各機関の連携ということは必要だし、今日の話における連携も大変に参考になった。ただ、それに対して地域住民に対する有効なアプローチがあれば、具体的な実践例なり、あるいはアイデアがあれば教えていただきたい」ということです。このへんは地域とのかかわりを持つ津屋さんの方から全体のコメントを含めて、何かご回答なり取組なりをお伺いできればなと思います。

津屋氏：地域住民代表としてここに座らせていただいているわけですが、私たちは一つの館に根を下ろすわけではない。私たちは例えば、滋賀県でどういうふうに文化を楽しもうかなと思ったときに、ゾーンとして見るわけです。どこに行ったら今日1日は楽しいだろうかと。長浜に行ったら何があるかなとゾーンとして私たちは見ていきます。でも、滋賀県に来て一番びっくりしたのは、文化の行政が全部見事に縦割りになっていたんです。琵琶湖博物館は環境何とか課で、陶芸の森美術館は商工労働部というところで、近代美術館だけが県民文化課というところで、もちろん、教育委員会には全く入っていませんし、MIHO MUSEUMは私立ですからまた違います。横でつながりようがないというか、教育委員会ともつながりようがない。でも、私たち利用者からみたら、その一つのエリアとして見たときに、例えば、信楽にはこういう美術館や施設があって、ここを有効にどう使いたいかという発想をしていきます。そうすると自ずと自然に縦割りを崩さない限りはとてもいいまちづくりになっていかない。すべての子どもに平等にほんものに触れさせたいという思いから、ずっと美術館と学校とでやっていく中で、一つのテーマとして「まちづくり」が自然と出てきました。

そのときに、これは一つの美術館、一つの美術館とばらばらとやっているのではなくて、例えば信楽だったら陶芸の森美術館とMIHO MUSEUMが手を結んだらどんなふうになるだろうという発想になっていきました。それで実は個々のプログラムではなくて、最近では2館合同プログラムをやっています。導入の部分でMIHO MUSEUMの学芸員さんのお話があって、制作の部分で陶芸の森美術館がかかわっていく。つくったものを使ってお茶を飲むとかご飯を食べるといった食育の方にまで入っていく。そうすると、「校外学習で、やっぱり行こうよ、信楽に」となっていく。そこで歴史の学習も入ってくる。二つの美術館を午前中はここに行って、午後にはここへ行く。ここへ行くところの学習、ここへ行くと

この学習と非常にそれが自然で根つきやすいものになっていく。大平さんが信楽の伝統、文化を発信されている。例えば県民文化課から、あるプロジェクトが降りてきたときに、県民感覚では、「陶芸の体験をするのなら、やはり信楽でしょう」と、信楽で焼き物をやるのが一番体験としてはいいのではないかと感じる。それで大平さんに相談する。でも、いざやろうとすると、この縦割りが非常に邪魔をして、「ここの事業主はここだから、使う場所はここ」ということになる。信楽公民館としたら、地元の子どもではなく、全県的に対象とすると、難題がたくさんあります。でも、次の大きなビジョンというものを描いたときに、まず、1回ここを壊してやってみようではないか、とやったときに、とても楽しいプログラムというか連携が進んでいく。文化がまちを元気にしていくというのは、こういうことかなと思います。

きのう、今日と多くの文化施設の方に集まっていたんですが、県民にとっては大変贅沢な企画だったと思います。一堂にこんなにたくさんの専門家の人と会えて。地域のボランティアはいつもアンテナを張って、自分たちは何かで社会に役立ちたいし、文化ホール、ミュージアムにはとてもあこがれを持っています。横でつながることによって私たちはすごくかわりやすくなっていくのかなと思いますし、そういったことがこれから進んでいったらなと思います。

木下氏：質問票の中に、「なぜ、教育現場にアートが必要なのか」という目的だとか、そういうことに関する質問がいくつかあります。

質問者：具体的な事例をいくつか聞かせていただいたんですが、それをやったことによってどう評価されていくのか実は知りたいところです。神奈川県の場合も平成16年度にいろいろな取組をされたかと思いますが、何かの目的、目標があって、それを実現するために、今回こういうプログラムをされたのではないか。滋賀県の場合も同じだと思います。その部分も少し詳しくお伺いをしたい。例えば、今年はここまでのレベルのものを実現する。2年目、3年目は右肩上がりにやっていきたい。例えば不登校の子どもさんの数が多いとして、アートを持ち込むことによって子どもさんたちが興味を持って学校に来た。不登校の数が減らせた。それも一つの客観的な数字だと思いますが、学校の現場で考えた場合に、それが社会に対してとか何か影響を与えたり目標を達成することができたのか。それが主観的ではなくて、客観的な数字があればお尋ねしたいと思います。

馬場氏：私たちが携わっている教育は即結果があらわれることはなくて、何年間か積み上げていく中で子どもたちが変わってきたなという、本当のちょっと変わったことを喜びとして日々をやっていくものです。しかし、ほんものと触れ合うことは、教育現場では、ほんもの大人と触れ合うこと、子どもたちに一生懸命自分たちにかかわってくれる大人がいるということ、一生懸命仕事に打ち込んでいる大人がいるということを知らせることだと思います。また、ずっと長く大切に守られてきた良質な文化が、日本だけでなく世界中にたくさんありますので、そういうものに触れ合うことによって、「命はずっと続くんだな。かけがえのないものはたくさんあるんだな」ということをまずは指導する教師が、それから周りでそれで囲む大人が、そして、子どもたちが感じてくれたらなというのを一番に願っています。

すぐにどうだったか、と言われると困りますが、いいものは子どもたちにはわかります。それは不思議なことに教師が一生懸命指導してもなかなか入らないことが、本当に初対面の方が話をしてくださることがスッと入るということもあって、それは人と人の不思議なつな

がりだなと思いますので、いろいろな方と触れ合っていくということを学校は大事にしていきたいなと思います。

大平氏：評価という話が出たのですが、ここにあるようにほんものというのは、いろいろな体験とか感性をはぐくむ、その集積だと思います。その集積ができてきて、その子どもたちが大人になったときに初めて評価できるものではないかと思います。

津屋氏：馬場先生とお出会いした初年度は1校だったんです。それが今は平均的に毎年20校、4,000人の子どもたちと連携授業をしています。1年生から6年生まで、あと養護学校も入ってきました。私たちは、連携授業を根づかせたい。その学校に、地域にずっと伝統としてその授業が残っていけるようにならないかなと思ってずっとやってきまして、学校の先生がかわってもそのカリキュラムが残ってきているんです。それは子どもたちの表情の変化とか、やはりそれを見た先生方がこれを続けようと評価していただいているのかなと思っています。

子どもは明確に反応いたしますので、いつも1回1回一期一会で失敗は許されない、大変真剣に皆さんに取り組んでいただいています。本当に子どもたちが感じてくれることが、励みになっている。そういうことだと思います。

松尾氏：STスポット横浜では、年度当初に計画書をつくりまして、中間評価報告書も書きまします。完了報告書も書きまして、行政の要望に応じて自己評価もします。そして毎年プレゼンテーションの機会があって、今年度の成果を発表してそれを審査されます。そういう行政内での評価システムにのっとった事業の進行の仕方をしています。予算は横ばいですが、どうやって中身の質を上げていくかというところで、かろうじて2年目に実施校数は増やしました。でも、それは本当に私たちの人件費を減らしてでもです。そういうことで、自己努力はしています。

ということで、自分たちが立てた目標に対して、その到達度の評価というのはきっちり受けております。ただ、あとは教育現場においてこのような事業がどのような効果をあらわしていくかに関しては、本当に不登校が減ったとか、そういうグラフになれば、本当にありがたい。そういう資料がほしいと思っていますので、文化側の方たちもそういう資料にして出すというのを一緒になってお手伝いをしてくれないかなとは思っています。

井口氏：高校の授業はもちろん、選択授業が多いですから、前向きに選択してとる子どもたちも多いですが、これしかないかなという気持ちで取る子ども中にはいます。それから、自分を変えたいという子が選択する場合があって、要するにコミュニケーションで自分を表現するのが苦手だ、下手だと思っている子がそういうものに参加して、ほかの子たちと触れ合いながら、その授業を受けることで自分自身が出せるようになってきた。それを授業が終わって自分自身の感想として述べているという例もあります。

だから、授業そのものに参加する動機はみんなそれぞれ違うと思います。そういうものを全部含んでいる、非常に形になりにくい部分を、あえて教育の中で挑戦しているところではないのかなという気がします。

畑中氏：馬場先生のおっしゃったことと重複するとは思いますが、特効薬はないと思います。博物館、美術館の評価と言って、じゃあ入館者が千人来たからBとか1万人来たからAとか、すぐにそういうのを求めたがるんですが、文化とか芸術は数字にならないと思います。種まきとおっしゃいましたが、私もこういうことは種まきをしていると思います。子どもの数だ

け種があります。10 まいたから 10 年後に 10 の実がなるということでもないのです。子どもによって実がならない子もいるかもしれません。けれど、千人のうち1人でもその子の人生の中で実になってくれたら、こちらとしてはそれがすごい成果だと思います。逆に言えば、成果を求めないでやっている部分は確かにあると思います。河合文化庁長官は「子どもが元気になれば、日本は元気になる」とおっしゃっていますが、そのためにやっているともいえます。

私の次女が幼稚園に行っているときに、園長先生からレイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』という本を紹介されました。非常に短いエッセイですが、これを読んだときに本当に目が覚めました。レイチェル・カーソンさんがおっしゃっていることを実践するために、その手助けになればという気持ちで私は連携授業をしています。

また、三浦敬三さんをご存じでしょうか。去年の2月に亡くなられましたが、生きていらっしゃればこの2月15日で102歳になられました。この方は100歳を越えてもスキーをされたのです。100歳を越えて運動ができるというのは、相当な健康管理だと思いますが、三浦さんは常に感動されるのです。この本の中にもレイチェル・カーソンが出てきます。敬三さんの告別式に配られた『101歳の少年』（最後の著書）を読みますと、「一番楽しいときはいつですか」と聞かれたときに「今日です」とおっしゃるんです。1日、1日の積み重ね、そういう生き方をされているので、ここまで長生きされたかなど。今の子どもたちにレイチェル・カーソンさんがおっしゃっている部分を磨いてもらい明るい未来、地域も日本も世界もそうだと思いますが、そこにつながればと、気の遠い話ですが、そういう気持ちで私はやっています。

木下氏： ありがとうございます。教育に関していっても先ほどの点数とか成果はどうしても求めてしまいます。そういう社会を我々はつくってきてしまった。感性をはぐくんでいくということは、そういうものとはちょっと機軸が違うものだからこそ、みんなで考えていかなければいけないことなんだけれども、そういう見えないものに対して肩身の狭い思いをするのも、いかなものかというのを私は思います。そういう社会を見直していくことが一つ重要なことだと思うし、レイチェル・カーソンが言っていることもそういうことだと思います。何か忘れていたものがあるのではないかと。今回は県内外からもいろいろとお越しただいていろいろなお話を伺おうと思って、ここに座ったんですが、ちょっとその時間がないので、非常に申しわけありません。

もう一つはつながるということです。なぜ、つながらなければいけないのか。なぜ、そういうことが問われているのかということ、管理社会だと思います。特に施設などは利用者のことを重点的に考えなくなってくる。そうすることは、利用者、地域住民という話もありましたが、非常に使いづらいものになっていくし、逆に必要もない施設もかなり増えてきてしまう。そういうところの中でもっとそういう目を持つためには、つながっていかねばいけないということが見えてきますし、それは地域社会、まちづくりについてもいえることだと思います。

今日は、こういう形で終わりにしたいと思います。実際にこれで終わりにしたくないですね。今回は非常に予算も時間もない中でやっておりますが、こういったネットワークをきちんと育てていくということが我々の役割なのではないかと思っています。

また、下からの政策、上からの政策という話もありましたが、上からの政策ということで

さまざまな自治体なり、組織なりにいろいろ働きかけていくこと、それから市民ネットワーク、できれば私は個人的に滋賀県の文化ボランティアネットワークというものを立ち上げていきたいと思っています。今日も学生さんもたくさん来ております。先ほども映像に映った中にうちの学生もたくさん入ってきています。そういう新たなネットワークづくりができるコーディネーターの養成も、大学の中で重要な課題だと思っています。いろいろな形の中で今日をきっかけとしながら、広がりを持たせていければと考えております。

本当に短い時間の中での交流会ということで申しわけないところもありましたが、これで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。